



【凡例】

会社名 (または刻印・煉瓦の仮称)

(印影・社章・屋号)

※印影・屋号・社章のサイズは任意

A:工場所在地
B:工場存続期間
C:当該刻印使用時期
D:刻印採取物件
E:該物件所在地
F:該物件建造年
G:マッチング根拠
H:特記事項
※印影文字は似たフォントで代用したものがある。 ※出典略記は以下の通り。煉瓦史:水野信太郎『日本煉瓦史の研究』、集成:同『国内煉瓦刻印集成』(中部産業遺産研究会『産業遺産研究』第8号)、『年報』:泉南市埋蔵文化財センター年報H22版

愛知県

金島山窯

張尾
金島山

A:知多郡常滑町金島山
B:明治11年(1878)~18年
G:印影、『煉瓦史』
H:常滑地方の土管製造業の始祖として知られる鯉江方寿の金島山窯で製造された煉瓦。県下の煉瓦製造の嚆矢といわれる。印影は『国内煉瓦刻印集成』より。鯉江方寿顕彰碑の敷地で見ることができる。

東洋組(刈谷分局)

愛知東洋組
刈谷分局
製造之印

A:碧海郡刈谷町
B:明治15年(1881)~18年頃
G:印影、『煉瓦史』
H:土族授産を目的に明治15年に興った東洋組の刈谷分局で使用された印。ここと西尾分局で煉瓦が製造された。該工場の煉瓦は東京湾要塞猿島砲台(M19竣工)で使用されているほか、刈谷市の工場所在地近傍(司町)でも数点を検出。司町のもは焼きの甘さが目立つ煉瓦である。

東洋組(刈谷分局?)

愛知東洋組
製造所之印

A:碧海郡刈谷町?
B:明治15年(1881)~18年頃
G:印影、『煉瓦史』
H:東京湾要塞猿島砲台(M19竣工)で使用。『集成』には縦長四角に漢数字"六十九"の添印のある印影が掲げられ、他に32、89等が確認されているとのこと。天工会社の添印は10の位に"十"を使っていない。

刈谷就産所(大野就産所、大野煉瓦工場)

井

A:碧海郡刈谷町
B:明治25年(1892)~昭和初期大野煉瓦工場~昭和6年頃廃業
G:屋号、『煉瓦史』
H:東洋組刈谷分局を興した大野氏が施設を引き継いで個人工場としたもの。井桁印は大野氏の屋号で『帝国商工信用録』T3にも記載がある。これで漢数字を囲んだものが煉瓦刻印として使用されている(東洋組分局以降刈谷就産所として再スタートするまでの間にすでにこの印が使われていた形跡あり。次印参照)。

赤坂川橋梁近傍転石(刈谷就産所?)

其

D:赤坂川橋梁下河中の転石
F:明治18年(1885)10月
H:2-1/4インチ厚の扇形異形煉瓦に打刻。正方形に近い井桁に漢数字三三と"シー"を刻む。同所で検出した撥形異形煉瓦は後年の規格に一致せず、それが定まる以前の製品、初代橋脚から出胎したものと推測される。即ち明治18年頃には井桁印の使用、および円形井筒用異形煉瓦の規格化と形状指示が始まっていたことになる。

石ヶ瀬川橋梁近傍転石(刈谷就産所?)

其 G

D:石ヶ瀬川橋梁下流の河原転石
F:明治24年(1891)6月
H:東海道線工事の準規格、M29の円形井筒用規格とは異なる平面形状の肉厚扇形異形煉瓦に打刻。他にも撥形異形煉瓦に"F"と"井桁+十六"を打刻したものが検出されている。天竜川橋梁などに採用された大形円形井筒のために設計・製造されたものの残余を転用していたものとみられる。同じ構成の刻印煉瓦が工場所在地近傍でも見つっている(後掲参照)。

刈谷市司町転石(刈谷就産所?)

廿 F

E:刈谷市司町4
H:刈谷市路傍で採取した肉厚撥形異形煉瓦。撥先125mm、撥元93mm、長229mm、厚78mmとかなり大きく、東海道線工事の準規格やM29規格にも見られないシェイプである。正体井桁ではなく菱井桁で漢数字を囲んでいるのが興味深い(同所検出"G"も同様)。同じ形状指示印に正体井桁を打刻したものが石ヶ瀬川河原でも見つっており、未だフォーマットが定まっていなかった時代の製品とみられる。

石ヶ瀬川橋梁近傍転石(刈谷就産所?)

D

D:石ヶ瀬川下流河原の転石、岐阜県垂井町路傍
H:肉厚扇形異形煉瓦に打刻されたアルファベット"D"とみられる記号。同じものが垂井町の市街地でも検出されている。この時期添字にアルファベットを使用していたのは刈谷の土族工場しかなく、井桁印はないものの同工場の製品と推定される。同じ理論で浜名第一橋梁の初代井筒の"E"(関東編刻印表参照)も同工場製の可能性がある。

片山工場

山片
十四

A:碧海郡新川町(T13頃:新川町38)
B:明治26年(1893)3月~大正13年(1924)頃?
D:新川町路傍の煉瓦壁
G:印影、『煉瓦史』
H:旧カプトビール工場、中央本線旧線隧道で検出。「片山」の文字と漢数字。工場所在地である新川町でも民家の煉瓦壁に使用されているのを検出した。

片山工場

A:碧海郡新川町(T13頃:新川町38)
B:明治26年(1893)3月~大正13年(1924)頃?
C:大正期?
G:社章(『大日本商工録』T7)
H:『大日本商工録』T7にはこのマークが社章として掲げられている。福井県舞鶴市金ヶ崎にて機械成形煉瓦に打刻したものを確認したが、新川町では見つけられず、位置的に富山の石黒煉瓦の製品かも知れない。

東洋組西尾土族就産所

土東洋組
就産所西尾

A:碧海郡米津村荒子、幡豆郡上町村北大山(弦西尾市米津町荒子・北大山)
B:明治15年(1882)東洋組西尾分局→18年天工会社→同年精成社→19年3月西尾土族生産所
C:明治15~18頃
G:印影、文献
H:東洋組西尾分局は明治18年より天工会社を名乗り、同名で18年中を操業、精成社と改名したのち明治19年3月に西尾土族生産所となった(『西尾市史』第4巻)。

東洋組(西尾分局)

土東洋組
就産所西尾分局

D:工場跡近傍瓦礫
H:一行目に「分局」がつくパターン。工場所在地に隣接する神社の社費で検出することができた。西尾市教育委員会市史編纂室蔵の西尾土族就産所製品のうちにもこのタイプがある。

天工会社(西尾工場)

西天工
尾工會
場社

A:碧海郡(現西尾市桜町)
B:明治15年(1882)東洋組西尾分局→18年天工会社→同年精成社→19年3月西尾土族生産所
C:明治16~18頃
G:印影、文献
H:印影は『集成』より。西尾市内で採取されたもので、「一五」を□で囲った添印がある模様。

「□+漢数字」刻印(天工会社?)

二七 三五

×1.5
D:工場跡近傍瓦礫、上町転石
H:「東洋組西尾分局」印の煉瓦等と共に転じていた肉厚撥形異形煉瓦に検出した漢数字"二七"は縦11mm、横9mmの縦長の四角。上町転石は俗字を使った"三五"。サイズ感は『集成』掲載の「愛知名古屋東洋組」三行印や天工会社印の添印によく似ており、特に10の位に"十"を使わない特徴がある。西尾分局で使用される(あるいは東洋組の共通フォーマット?)、天工会社で引き続き使われた識別印であるのかも知れない。

「□+カナ」刻印(西尾土族生産所?)

イ ホ
シ エ

×1.5
D:西尾市街各所転石
E:西尾市上町下屋敷11、西尾市錦城町(西尾藩勘定所跡民家)、米津町
H:揖斐川橋梁や敦賀港駅ランプ小屋の"□+漢字"印に酷似した印で、漢字ではなくカナを内包する。厚3インチの肉厚普通煉瓦に打刻され、その厚さや検出地点から、西尾土族生産所が鉄道局の煉瓦を製造していた時期の刻印ではないかと考えられる。西尾市史第4巻p.133掲載の明治20年棚揚げ表にある"イロ八印形"がこれに該当するか。

「□+れ」刻印(西尾土族生産所?)

れ

×1.5
D:西尾市米津町転石
H:12ft B形とみられる肉厚撥形異形煉瓦に打刻。「□+れ」は径9mmほ。また径22mmほどの○印も添えられる。丸印の端は□にフィットするように変形しており一体の印のように見えるが、□は水平に、○は下側が深く打たれており別個に打刻したものと推定される。

「廿五」刻印(西尾土族生産所?)

廿五

×1.5
D:西尾市錦城町・西尾藩勘定所跡縁石
H:西尾藩勘定所・地方役所跡に建つ民家の裏庭、道路との境の縁石に検出。「□+漢数字」印の漢数字部分と同じサイズ・書体の"二五"に丸形を打刻。丸形は左記のものよりも小ぶり変形はない。

”二三”(西尾土族生産所?)

二三

D:駐車場脇転石
E:西尾市伊文町
H:西尾市街で検出した東海道線用異形煉瓦"イー"・"デー"や、ともに転じていた肉厚普通煉瓦には漢数字の識別印が添えられていた。他にも"六"を検出。印面から印台座面にかけて台形状になった判で、文字とその周辺が深い凹みになっている特徴がある。大ききの割に太い書体で非常に詰まった感じがする印である。

「イー」+漢数字(西尾土族生産所?)

イ

(漢数字不鮮明)
×0.8
D:駐車場脇転石
E:西尾市伊文町
H:9ft用撥形異形煉瓦(肉厚)に打刻。漢数字部分は土に塗れて判別できず。第二浜名橋梁初代井筒で検出したものと同じパターンで、西尾土族生産所の製品である可能性が高い(だとすると短期間のうちに印のパターンが変わったことになるが…)。

「デー」+十七”(西尾土族生産所?)

テ

×0.8
D:駐車場脇転石
E:西尾市伊文町
H:9ft用扇形異形煉瓦(肉厚)に打刻。西尾土族生産所はM20.10月11月時点で「イー形」「デー形」煉瓦を製造していたことが西尾市史第四巻pp.132-133にある。浜名橋梁やその前後の9ft円形井筒の橋梁はM20.1.着工~M21.3.竣工で(『各所管官有財産目録 上巻』、工事時期にも一致する)。

“○日”刻印(西尾土族生産所?)

日

D:民家脇転石
E:西尾市伊藤町
H:B形撥形異形煉瓦の平に打刻。この煉瓦も厚75mmを測る肉厚煉瓦で、検出地点からすれば西尾土族生産所の製品ということになるが……一連の(推)生産所製品とは異なり、何を意味する刻印なのか判断がつかぬ。少なくとも"B"の読み違いではない(型を採取して確認)。

勢陽組”セ”(肉厚撥形)

セ

D:西尾市尾澤歯科医院旧宅縁石
E:西尾市伊文町66
H:左記同所にはおおぶりな"セ"を打刻した肉厚撥形異形煉瓦もひとつ混じっている。小口107mm/95mmと後年の井筒規格に一致しない寸法で、形状指示の印もない。東洋組印の煉瓦と共使的に使われていることからしてもかなり初期に製造されたものと推測される。

石ヶ瀬川橋梁近傍転石
(四日市煉瓦会社?)



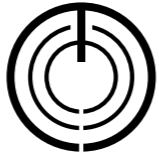
D:石ヶ瀬川下流河原の転石
H:石ヶ瀬川の河原では様々な煉瓦を
検出するが、その中で最も多いの
が斜井桁+三線の刻印で、肉厚普通
煉瓦に打刻したものでなく"ビー
ー"や"イー"の添字を有する異形煉瓦
も見られる。東海道線に採用された
工場の中でも後発組に属するため残
余が多かったのかも知れない。添字
は図示した"十九"が最大。いずれも
は"もしくは"八"を頭に冠している。平
に長石or石英の石粒が多数露出す
る特徴あり。

西尾市尾澤齒科縁石
(四日市煉瓦会社?)



D:西尾市尾澤齒科医院旧宅縁石
E:西尾市伊文町66
H:旧宅東側の市道に面した縁石に
検出。ここには"東洋組西尾土族生産
所刻印煉瓦が多数使用されている
が、その中に一つだけ三筋井筒の印
がある。中央のカナが"に"なのが珍し
い(普通厚の煉瓦に打刻されたもの
で、その違いに因るのかも知れな
い)。三重県四日市煉瓦会社の項目
参照。

平坂煉瓦株式会社



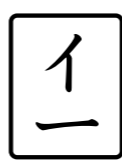
A:幡豆郡平坂村(S13頃:幡豆郡平
坂町大字平坂字丸山7)
B:明治34年(1901)11月合資→大
正2年株式→大正6年2月大阪業
平坂工場
G:社章(『帝国商工信用録』)
H:平坂村で大きく成長した煉瓦工
場。『帝国商工信用録』T3版に社章
の記載があり、株式会社時代にはこ
のマークを用いていた(「平」字の意
匠化)。大正6年に大阪業に買収さ
れてからは主に耐火煉瓦を製造し
た。

根崎煉瓦工場(岡田煉瓦工場)



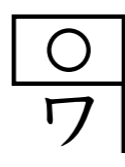
A:碧海郡明治村(大字根崎)
B:明治28年(1897)8月~現業
G:文献(『岡田煉瓦100年史』『大日
本商工録』T7)
H:岡田平八、岡田松太郎、杉浦宇右
衛門の共同出資で設立。当初は素地
煉瓦を製造し、明治30年合資会社と
なってから鉄砲窯での焼成を開始。
明治40年より岡田氏の個人工場と
なって製造を続け、今日に至ってい
る。『岡田煉瓦100年史』p.52にこの
印影の判を掲出(『大日本商工録』屋
号掲載)。煉瓦からは未検出?

岡田煉瓦工場(根崎煉瓦
岡田工場)



A:碧海郡明治村(大字根崎)
B:明治28年(1897)8月~現業
D:旧カプトビール建屋
E:明治31年(1898)
G:文献(『集成』、『岡田煉瓦100年
史』)
H:旧カプトビール工場建屋で検出さ
れた刻印。『岡田煉瓦100年史』に同
社の使用印であると記述されている。
正確には根崎煉瓦岡田工場時代の
使用印。第一浜名橋梁の複線化井筒
(明治37.8.開業)にも"イ四"刻印の
異形煉瓦が用いられている。

岡田煉瓦工場



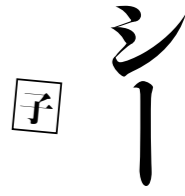
A:碧海郡明治村(大字根崎)
B:明治28年(1897)8月~現業
D:東海道線揖斐川橋梁(複線化橋台)
E:M41.4.30.開業
G:文献(『集成』、『岡田煉瓦100年
史』)
H:旧カプトビール工場建屋で検出さ
れた刻印のひとつ。『岡田煉瓦100年
史』に同社の使用印であると記述され
ている。東海道線揖斐川橋梁の二代
目橋台(東橋台)天辺でこの刻印を見
ることができる。

市古工場



D:東海道線木曾川橋梁井筒(改築部)
H:一宮方の残存井筒の異形煉瓦C
に相当する位置に使用。木曾川橋梁
の橋脚井筒は濃尾地震により被害を
受け、折損した川底・地表面から数フ
ィート掘り下げた上で積み直しがあ
られたといい(『震災予防調査会報告
第1号』)。今日地表に露出している部
分も改築時のものとみられる(〜明治
25年1月)。また愛岐トンネルでも似
たような刻印の検出あり(〜明治33
年)。なお北大浜村は明治18年11月
成立、25年8月に新川町となった。

形状表示+"□+カナ"印
(市古工場)



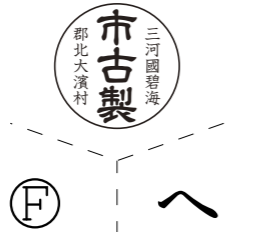
B:明治25年(1892)
D:東海道線木曾川橋梁井筒(改築部)
E:愛知県一宮市北方町
H:木曾川橋梁井筒には左記検印と
ともに形状指示印"シー"が押された
煉瓦も使用されており、この"シー"
に"□+カナ"印を添えた刻印煉瓦も
ある。"シー"を媒介して"□+カナ"印
が古市工場の識別印だったことがわ
かる。同工場は東海道線建設時に"〇
+英字"を使っていたことがわかって
いるが(関西編参照)、濃尾地震前後
に切り替えたものであるらしい。

形状表示+"□文字"印
(市古工場)



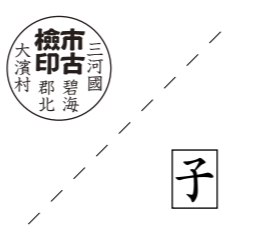
B:明治25年(1892)
D:東海道線木曾川橋梁井筒(改築部)
E:愛知県一宮市北方町
H:左記2印のある井筒には他にも扇
形異形煉瓦に"エー"+"□+カナ"を
打刻したものが検出される。添印の
□はやや長体で、角が立った四角で
ある傾向があるようだ。また同井筒に
は"ビー"のみ打刻した撥形異形煉瓦
も多数使用されていて、使用状況か
らこれも市古工場の製品である可能
性が高い。

"市古製"印+"へ"+"ⓕ"



D:愛知県碧南市久沓町2転石
H:市古工場の所在地近傍で検出。
同平面に"市古製"印と"へ"を、小口
に"ⓕ"を打刻した普通厚煉瓦の断
片。工場印と"〇+英字"印や"□+カ
ナ"印のセットは現地でもいくつか検
出されたが3点セットになったものは
稀。"へ"は滋賀県東海道線鯉川暗渠
で検出したカナ印と同系統の印とみ
られ(但し該印は肉厚煉瓦小口に打
刻)、該煉瓦も市古工場製であった可
能性がある。

"市古検印"印+"子"



D:愛知県碧南市久沓町2転石
H:市古工場の所在地近傍で検出。
平に"市古検印"印を、小口に"□+
子"を打刻した肉厚扇形異形煉瓦。木
曾川橋梁残存井筒で検出した"市古
検印"印煉瓦(形状指示"シー"がある
ものもあり)と同じものとみられる。鯉
川の暗渠群の使用例からこちらのほ
うが使用時期は古いらしい。なお久
沓では"□+カナ"と"シー"が打刻さ
れたものも検出。また"市古製"印は"
市古検印"印よりも一回り大きい。

"▲"



D:愛知県碧南市久沓町2転石
H:市古工場の所在地近傍で。両面
打刻・Y線あり。兵庫の(推)関野煉瓦
に似るが底辺が長い二等辺三角形に
似る。四日市煉瓦△Y.B.の潰れ
たものかも知れない。

楕円+"+"



D:西尾市楠村町転石
H:旧碧海郡楠村で採取。同所にあっ
た永江煉瓦工場は昭和5年頃に"マル
十"という屋号を掲げていたらしく
(『工場通覧』S7版に文字表記でそう
書かれてある)、同工場の使用印と推
定される。打刻された煉瓦は
224x102x56mmで作業局形と推
定されるもの。

かな印



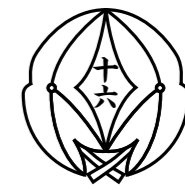
D:西尾市楠村町転石
H:左記「楕円+"+"」の近傍で、円筒
形に構築されていた構造物のものと
みられる瓦礫に検出。長手223mm、
長弦長111mm、短弦長102mm、
厚55mmの扇型異形煉瓦に打刻。他
に"に"も存在。

漢数字+かな印



D:西尾市楠村町転石
H:前記「楕円+"+"」「かな印」の近
傍で検出。独立転石。西尾市西小柳
町では同様の書体で「へ三」と打刻さ
れたものがあり、順序は問わず漢数
字+かなを識別印として用いていた
工場があったものと推定される。

抱き沢瀉+漢数字
(水野煉瓦工場?)



A:碧海郡根崎村
B:明治30年(1897)4月~39年頃
D:碧南市、刈谷市、草津市、彦根市
市街転石
H:漢数字添字を内包する径8分ほど
の抱き沢瀉の家紋。非常に繊細な線
で蕊の丸形まできちんと再現されて
いる。碧海郡域で比較的頻繁に見ら
れ、3インチ厚煉瓦に押されているも
のが多いことから明治中後期の製品
であることは確か。根崎村の水野煉
瓦工場(工場主・水野芳太郎)が使用
した印か。

勢陽組(勢陽社)



D:東海道線木曾川避溢橋、五條川
橋梁井筒
H:12ft円形井筒を採用した木曾川
避溢橋(M20.6.竣工)、五條川橋梁
(M20.1.)の井筒の頭に検出。木曾
川避溢橋のものは平全形が露出して
おり添字を有さないことを確認した。
後年規格Bに比べ長手が若干長く、
工場跡で採取したものとよく似てい
る。東海道線横浜~熱田間の工事に
先駆けて建設されたこの区間では同
工場製品が多く使われていたよう
である。(三重県・勢陽組の項参照)

勢陽組印+"ク"



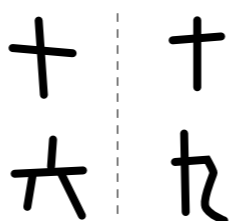
D:武豊線英比川橋梁橋脚井筒
F:明治24年(1891)1月
H:英比川橋梁の第一橋脚の井筒に
露出。同井筒には勢陽組印のみのも
のや大型カナ印、形状指示"ビー"と
大型カナ印を打刻した煉瓦が用いら
れている。特に最後の一つは諸戸家
住宅にも使われている組み合わせで
水谷氏の個人工場となった後で製造
されたもの=竣工年に比較的一致す
るものとみられる。

神谷工場?



A:碧海郡高浜(S37:碧南市高浜町
高浜横浜40)
B:明治35年(1902)7月~昭和37
頃?
D:高浜市路傍陶管銘
H:県道46号旧道沿いの民家軒下に
置かれていた陶管に「KAMIYA.
C.W/AICHI-JAPAN」の表記とともに
この屋号が刻まれていた。高浜市
域で創業した神谷秀夫工場の製品
か。同じマークを打刻した機械成形
煉瓦が大阪・兵庫で検出されている。

半田レンガ建物舗石



D:半田赤レンガ建物舗石
E:明治31年(1898)~
H:旧カプトビール工場を転用した施
設の庭の舗石に使用。金釘流の漢数
字の印で、重ね打ちされたものもあ
るため手書きではなく印による打刻
とみられる。印の雰囲気は大阪府下
で検出される漢数字(細)印に似るが
完全一致するものは得られなかった。

奥谷煉瓦化石製造所



A:碧海郡新川町字田尻100
B:明治39年(1906)3月~昭和32
年(1957)頃?
G:屋号(『大日本商工録』T7)
H:『大日本商工録』T7に屋号掲載。
煉瓦への使用は未確認。

岡本煉瓦工場



A:碧海郡新川町5(S23:鮎65)
B:大正元年(1912)5月~昭和35年
(1950)頃?
G:屋号(『大日本商工録』T7)
H:『大日本商工録』T7に屋号掲載。
工場主・岡本五市の「五」か。煉瓦へ
の使用は未確認。

太田札右衛門工場



A:碧海郡明治村和泉71
B:明治41年(1908)~大正7年
(1918)頃?
G:屋号(『大日本商工録』T7)
H:『大日本商工録』T7に屋号掲載。
煉瓦への使用は未確認。

永江煉瓦工場



A:幡豆郡平坂村(T7:楠61、S5:楠
村堂地)
B:明治27年(1889)5月~昭和14
年(1939)頃?
G:屋号(『大日本商工録』T7)
H:『大日本商工録』T7に屋号掲載。
煉瓦への使用は未確認。昭和5年頃
は「〇十」を屋号にしていた可能性あ
り。

カネヤ小島煉瓦工場



A: 幡豆郡平坂町楠村17(S21)
B: 明治39年(1906)~昭和21年(1946)頃?
G: 屋号(『大日本商工録』T7)
H: 『大日本商工録』T7に屋号掲載。煉瓦への使用は未確認。

榊原煉瓦土管工場



A: 幡豆郡寺津町寺津17
B: 明治25年(1982)2月~昭和24年頃?
G: 屋号(『大日本商工録』T7)
H: 『大日本商工録』T7に屋号掲載。『工場通覧』では大正8年~13年、昭和21年~24年頃に操業を確認できる。煉瓦への使用は未確認。

横井煉瓦工場



A: 碧海郡大浜町
B: 大正6年(1917)~13年頃?
G: 屋号(『大日本商工録』T7)
H: 『大日本商工録』T7に屋号掲載。煉瓦への使用は未確認。

佐野金右衛門(山本屋商店)



A: 豊橋市中八丁連隊前
B: 明治29年(1896)~大正13年頃?
G: 屋号(『窯業銘鑑』T14)
H: 『窯業銘鑑』T14に屋号掲載。煉瓦への使用は未確認。

倉橋繁治(大津屋)



A: 豊橋市船町新造(S24: 豊橋市花田町守下45-3)(S26: 豊橋市飯材町西山25-9)
B: 大正元年(1912)~S24頃大津屋建材(有)~S26大津屋建材(株)煉瓦工場
G: 屋号(『大日本商工録』S7)
H: 『大日本商工録』S7に屋号掲載。戦後は大津屋建材として耐火煉瓦を製造した。煉瓦への使用は未確認。

平松良太郎(平松煉瓦製造部)



A: 知多郡上野村荒尾
B: 明治30年(1897)9月~大正13年頃?
G: 社章(『大日本商工録』T7)
H: 『大日本商工録』T7に屋号掲載。同書が初出で「兼白米浸炭味噌漬酒塩」とある。後年には「平松煉瓦製造部」として掲載される。煉瓦への使用は未確認。

江西煉瓦工場



A: 碧海郡刈谷町
B: 明治40年(1907)4月名和煉瓦工場→T7頃寺西小三郎→T8頃江西煉瓦工場→T9頃廃業?
G: 屋号(『商工興信録 本州中部地方』T8)
H: 『商工興信録 本州中部地方』T8に屋号記載。煉瓦への使用は未確認。

亀崎煉瓦工場



A: 知多郡亀崎町亀崎(S21: 半田市亀崎町蛇抜62)
C: 大正9年(1920)2月→現業?
D: 大正期?
G: 屋号(『大日本商工録』S3)
H: 『大日本商工録』S3に屋号掲載。煉瓦への使用は未確認。

亀崎煉瓦工場



A: 知多郡亀崎町亀崎(S21: 半田市亀崎町蛇抜62)
C: 大正9年(1920)2月→現業?
D: 大正期?
G: 『煉瓦史』『集成』
H: 『煉瓦史』に刻印煉瓦を掲載。

岡崎煉瓦(合資)



A: 岡崎市中町字仲道17(T7)(S24: 岡崎市中町4-6-8)
B: 大正5年(1916)月合資会社→T15頃株式会社→S13三河珪石(株)煉瓦部→S21赤煉瓦製造→S26頃廃業?
G: 社章(『商工興信録 本州中部地方』T8)
H: 『商工興信録 本州中部地方』T8に社章記載。赤煉瓦だけでなく耐火煉瓦も製造した。煉瓦への使用は未確認。

永江工場



A: 愛知郡笠寺村大字鳴尾(T7: 鳴尾1320)
B: 明治42年(1909)12月→大正7年(1918)頃?
G: 屋号(『大日本商工録』T7)
H: 『大日本商工録』T7に屋号記載。煉瓦への使用は未確認。

神谷煉瓦工場



A: 碧海郡高浜町(S13: 高浜字高浜21)(S37: 高浜横浜40)
B: 明治35年7月神谷煉瓦工場→大正5年5月神谷芳太郎煉瓦工場→S37頃神谷秀夫
C: 明治40年頃
G: 文献(『煉瓦史』p.110)
H: 東京都中央区銀座の旧黒澤ビルで検出された刻印。『煉瓦史』で神谷源之助工場の刻印と推定されている。同ビルでは○に横線を添えた刻印も見つかっている。



竹内仙太郎(菅島灯台使用煉瓦)



A: 志摩郡渡鹿野村
B: 明治4年(1871)~6年頃
D: 菅島灯台附属官舎
E: 三重県鳥羽市菅島
G: 文献(『煉瓦史』)
H: プラントン指導のもとで菅島灯台が建設された際、地元渡鹿野島の瓦屋・竹内仙太郎に煉瓦を焼かせた記録がある。平全面に凹みを設け、その中央に竹内の屋号である「ヤマ千」を刻む。他に安乗崎灯台官舎、角島灯台にも使用されたという。

勢陽組(勢陽社)



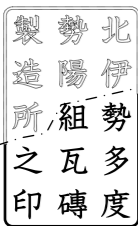
A: 桑名郡柚井村/河曲郡岸岡村(若松村大字岸岡)
B: 明治17年(1884)8月→M22末水谷工場→M28頃廃業?/明治19年4月勢陽社支店→M21三重勢陽組→M27頃煉瓦製造場→M30頃廃業?
D: 滋賀県米原市転石
G: 文献(『汐留遺跡』)
H: 新橋駅遺構で社印+識別印の煉瓦が出土。桑名市多度町多度/柚井にこの刻印煉瓦が多数検出される畑があり、工場跡と推定される(80mm弱の肉厚異形煉瓦多し)。

勢陽組(勢陽社)



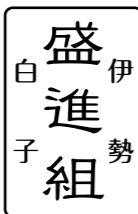
A: 桑名郡柚井村/河曲郡岸岡村(若松村大字岸岡)
D: 桑名市多度町柚井転石、諸戸家煉瓦構造物、鈴鹿市岸岡転石
H: 勢陽組印の押された煉瓦は柚井の工場跡や支店のあった鈴鹿市岸岡でも確認されている。組印+カナは少なく、むしろ組印のみを押したのが多い。柚井では大型の撥形異形煉瓦に押されたものを採取。該煉瓦は後の規格のサイズではなく、むしろ東海道線土神崎川橋梁使用撥形煉瓦(M9製造)に近いのが興味深い。

(推) 勢陽組



D: 桑名市柚井転石
G: 印影
H: 「愛知東洋組」の三行印によく似た構成。上半分が欠損しているため確定的ではないが、一行目末尾の二文字は「多度」とあるように読めるので上記のように復元できるのではないかと推定される。勢陽組が初期に使用した刻印か。

盛進組



D: 鈴鹿市岸岡転石
G: 印影
H: 勢陽組支店があった岸岡で採取。印影から当地にあった煉瓦工場の製品とみられるが各種資料には見えない組名である。支店の前身あるいは後身となった工場の使用印か。

柚井転石(勢陽組/水谷工場)



D: 桑名市多度町多度/柚井
G: 分布状況
H: 工場所在地の転石は①勢陽組印のみ押された普通煉瓦②同肉厚異形煉瓦③「エー」・「ビー」・「シー」の文字とともに押された大型カナ刻印印肉厚異形煉瓦に大別される。③の「エー」等は異形煉瓦の形状を表示したものと見られ、その対応は京都桂川橋梁築架側井筒のA~Cに一致。大型カナは作業者識別用か。同様の印が桑名市諸戸家住宅にも見られ、やはり肉厚異形煉瓦である。

関西本線加太地区使用煉瓦(勢陽組/水谷工場)



D: 関西本線市場川橋梁、第165号橋梁、大和街道架道橋他
E: 関西本線加太駅附近
F: 明治21~23年頃
G: 印影、分布状況
H: 関西本線加太駅周辺の煉瓦拱橋に見られるカナ文字の刻印(市場川橋梁「ク」「ナ」、第165号橋梁「ウ」、大和街道架道橋「ワ」等)。いずれも小口幅の1/3ほどの大きさで、同サイズのカナ印が柚井の勢陽組工場でも確認されている。同工場は関西鉄道と取引があった記録あり。

”宮川”印



D: 桑名市多度町柚井転石
H: 勢陽組工場跡と推定される畑で採取。トメハネがはっきりとした、上例よりも角ばった書体で「宮川」と記される。中央縦に大きく打刻。該煉瓦は角の一つが片流れ式に割られ、その断面と小口が火を受けて溶融しているため、窯を構成していた煉瓦の一つと推定される。工場創業にあたって使用する煉瓦を焼いた瓦屋の印か。

関西鉄道加太トンネル用煉瓦製造場



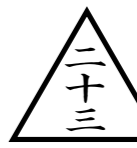
A: 阿山郡東柘植村字一ツ家
B: 明治22年(1889)~23年
D: 関西鉄道加太トンネル、堅坑遺構他
G: 文献(『三重県近代化遺産調査報告書』)、分布状況
H: 関西鉄道の加太トンネル建設に際し、現場近くに設けられた工場で使用された刻印。扇型に漢数字(+「番」)を配す。工場跡地や堅坑跡で該刻印を見ることができるとは、焼損煉瓦を貰い受けて築いたという壁が柘植町小林に現存する。同工場は「関西煉瓦製造所」と呼ばれていた。

四日市煉化製造所(四日市煉瓦)



A: 三重郡東阿倉川村
B: 明治20年(1887)6月→26年4月四日市煉瓦製造所→T7頃合資会社→昭和21年(1946)頃廃業?
D: 中央本線旧線(愛岐トンネル)
G: 社章(『大日本商工録』T7)
H: 三重県下で2番目に古い煉瓦製造会社。三角形にYokkaichi Brickの頭文字を配す。中央本線旧線(明治33年開通)の廃線敷、北陸本線山中トンネル(明治29年竣工)で刻印煉瓦が出土している。後者はかな+漢数字の添印付き。

(推) 四日市煉化製造所



D: 岐阜県関ヶ原市関ヶ原転石
H: 四日市煉瓦社章の三角マークに漢数字を容れる。そのパターンから四日市煉瓦の製品と想像される。同形刻印は愛岐トンネル群でも検出されている。なお左の山中トンネル使用煉瓦には裏面の筋があるが、関ヶ原転石(漢数字二十三)にはない。また四日市煉瓦の製品は石英or長石の白い石粒を多く含み、それが平に露出していることが多い特徴がある。”△Y.B.”マークはM26以降に使用され始めたものと推測される。

(推)四日市煉瓦会社



C:明治20～26頃？
D:四日市市万古町1民家舗石
H:四日市煉瓦所在地の南方、100年以上前からあった窯業窯の解体瓦礫を使った舗石に検出。四日市煉瓦は明治21年3月に「東海道鉄道用厚形煉瓦石」を請負い、この月だけで6万個余り、後にも普通煉瓦を数万個製造した記録がある(官報1888年5月9日他)。この刻印が同社初期のものとするれば東海道線全通頃の構造物で検出されていることを矛盾なく説明できる。胎土も△Y.B.煉瓦に似る。

神瀬橋(脇谷橋)使用煉瓦



D:県道熊野街道神瀬橋(脇谷橋)
E:多気郡大台町神瀬字脇谷989
F:明治40年(1907)10月
H:明治末に建設された煉瓦拱橋・神瀬橋に使用されている煉瓦(下流側欄干の根元)。平面に「五七」「五八」「五九」等の漢数字を刻む。関西地方で見られる漢数字刻印に似ているが、手書きの線刻であるところ、50台以上の数字しか見られないところに特徴がある。類似刻印を静岡市駿河区石部で検出。

舟木橋橋脚使用煉瓦



D:県道熊野街道舟木橋
E:多気郡大台町佐原～度会郡大紀町
F:明治38年(1905)
H:旧舟木橋の大紀町側橋脚の足元に見られる煉瓦刻印。径1cmほどの小型の〇印。碧南市田尻(碧海郡新川町田尻)周辺で類似刻印を複数検出。また静岡県石部トンネル初代坑道内でも肉厚煉瓦に打刻されたものを検出した。

岐阜県

形状表示+”□文字”印(西尾士族生産所?)



B:明治19年(1886)頃
D:揖斐川橋梁第一橋脚付近瓦礫、第四橋脚(側面に露出)
E:岐阜県大垣市新開町・安八郡安八町
H:M19.12竣工の井筒あるいはその残欠とみられる瓦礫に検出(肉厚異形煉瓦・小口打刻)。精成社時代に鉄道局の発注を受けていた西尾士族生産所がM20.2までに「A、B、C厚型」を含む228万個余りの煉瓦を製造した記録があり(『西尾市史』第4巻p.130)、同工場の製品である可能性が高い。「口荻」は径約5mm。

形状表示+”□文字”印(西尾士族生産所?)



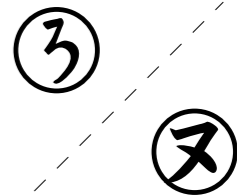
B:明治19年(1886)頃
D:揖斐川橋梁第一橋脚付近瓦礫
H:濃尾地震後の復旧工事の際に遺棄されたとみられる瓦礫から採取。肉厚の扇形異形煉瓦に打刻され、添印「口土」は径約7mm。型取材で印影を再現し比較すると敦賀港ランプ小屋の「口土」と完全に一致することが判明した。西尾士族生産所の操業初期には鉄道局直轄工場のような扱いで、他工場を寄せ付けない勢いであつたらしい(『西尾市史』第4巻p.125)。

形状指示”ビー”



×0.6
D:東海道線五六川橋梁井筒
E:岐阜県瑞穂市野田新田
F:明治19年(1889)10月
H:五六川橋梁穂積方の橋台井筒に検出。長音記号が左寄りになっているのは天竜川橋梁で検出した「ビー」+「口青」や木曾川橋梁井筒「ビー」と共通しており、サイズ感・骨格もほぼ一致する。「口+漢字」印の使用工場＝西尾士族生産所(あるいは天工会社時代)の製品と推測される。

奥田煉瓦・中央煉瓦製造所”○+かな/カナ”印



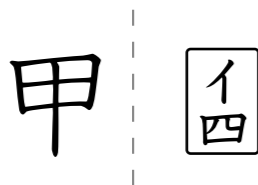
A:不破郡青墓村矢道738
B:明治30年4月操業～40年5月中央煉瓦製造所～昭和22年頃廃業
D:東海道線甲・乙大門西暗梁
F:明治41年(1908)頃？
H:甲大門西暗梁の「○+ろ」は矢道町転石や滋賀県瀬田川橋梁橋脚瓦礫のもの(形状指示印“A”あり)と一致。矢道にあった奥田煉瓦工場が用い、明治39年or40年に中央煉瓦製造所となつてもしばらく使い続けたようである。

奥田煉瓦・中央煉瓦製造所形状指示印



D:大垣市矢道町転石
F:明治30年代？
H:細身で大形のアルファベットによる形状指示印。工場所在地の矢道で肉厚撥型異形煉瓦に打刻されたものを検出。同系刻印は湖東線沿線各所や垂井駅前市街地などでも見つかっており、「○+かな/カナ」の添印があるものも多い。工場の操業時期から東海道線複線化にあてて製造したものと考えられる。

岡田煉瓦 形状指示”甲”



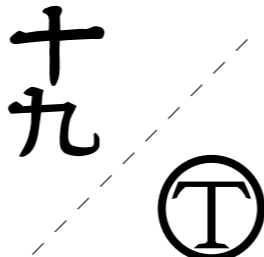
×0.6
D:岐阜県瑞穂市別府路傍転石
F:明治41年(1909)？
H:長良川橋梁の東岸の集落で検出。識別印「イ四」と同じくらいの大きさの形状指示印「甲」が打刻される。該煉瓦はM29規格小楕円形井筒用「甲」に一致する寸法の扇形異形煉瓦で、長良川橋梁複線化時に持ち込まれたものと推測される。

堺煉瓦”ヤ”



D:岐阜県瑞穂市別府路傍転石
F:明治41年(1909)？
H:長良川橋梁の東岸の集落で検出。普通厚の扇形異形煉瓦に打刻。堺煉瓦製品の分布の最東端となるもので、長良川橋梁複線化時に持ち込まれたものと推測される。

東京煉瓦 ①+”十九”



A:東京府南足立郡江北村大字鹿浜→江北村大字宮城874
B:明治31年(1898)4月→大正6年宮城に移転？
D:岐阜県瑞穂市別府路傍埋石
F:明治41年(1909)？
H:長良川橋梁の東岸の集落で検出。石部トンネル等で見られるよりも太い〇にセリフ書体のT。漢数字「十九」の添印もある。添印はトメハネのしっかりした明朝体。複線化時に持ち込まれたものか。

”アヤド”印



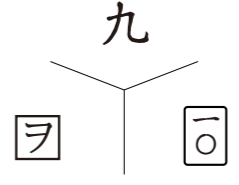
D:関ヶ原町、垂井町路傍転石
H:旧中山道沿いで検出した印で、「アヤド」は垂井町綾戸のことを指しているものとみられる。厚56mm(2-1/4インチ)。付近一帯に煉瓦に適した土があったことはボイルによる中山道線測量の報告にもあり、また綾戸の東隣・矢道には明治中後期から煉瓦工場が所在した(奥田煉瓦石製造所→中央煉瓦製造所)。記録に残らないような小規模な工場、あるいは瓦製造との兼業の工場が綾戸にもあったのかも知れない。

(合資)天友商店(天友赤煉瓦工業(合資))



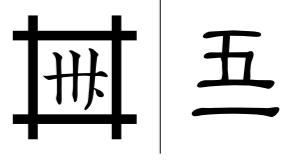
A:岐阜市長良福光1608
B:大正2年(1913)3月(T13.4?)～昭和34年頃？
G:屋号(『大日本商工録』S3)
H:『大日本商工録』S3に屋号記載。煉瓦への使用は未確認。

木曾川橋梁第七橋脚瓦礫(西尾士族生産所製品)



D:木曾川橋梁第七橋脚(初代)瓦礫
F:明治20年6月(同25年修築)
H:右岸側低/高水敷の境にある橋脚の根本の瓦礫に検出。同所では西尾士族生産所「口+ヲ」や東洋組～精成社時代の識別印「口+一〇」も見られた。いずれも肉厚普通煉瓦に打刻。肉厚普通煉瓦は井筒間に架け渡された壁体に用いられていたものとみられるが、濃尾地震で全改築されたはずなので、西尾士族生産所の操業時期との兼ね合いを再検討する必要がある。

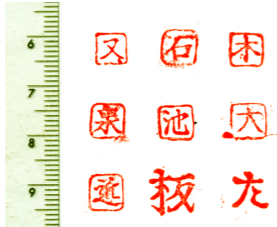
木曾川橋梁第七橋脚瓦礫(複線橋脚)



D:木曾川橋梁第七橋脚(複線)瓦礫
F:明治44年6月
H:第七橋脚近傍の2-1/4インチ厚煉瓦には大野工場の井筒印や手書き風の漢数字刻印を検出。静岡県石部トンネルの瓦礫の検出状況によく似る。異形煉瓦には刻印が見られず、唯一扇形煉瓦の断片に漢数字「二」を検出したが、形状指示なのか識別印なのか判断しづらい。この煉瓦の手触りは千曲川橋梁橋脚瓦礫のそれによく似るが、胎土は白斑混じり・白色石粒を多く含む。

福井県

旧敦賀港駅ランプ小屋



D:旧敦賀港駅ランプ小屋
E:舞鶴市金ヶ崎町1-19
F:明治15年(1882)？
H:旧敦賀港駅ランプ小屋に使用されている煉瓦の刻印。径7mm(2分)の小さな印で、「土」「木」「又」等の漢字一文字を四角で囲む。小口に押されているのが特徴(『土木史研究講演集』2006年第26回pp.61-67参照)。このうち「土」「青」は揖斐川橋梁瓦礫に検出されたものに一致し「平」も類似性が認められる。西尾士族生産所の製品か。

旧敦賀港駅ランプ小屋”土”



D:旧敦賀港駅ランプ小屋、初代揖斐川橋梁橋脚瓦礫
F:揖斐川橋梁～明治19年(1886)12月
H:ランプ小屋刻印と揖斐川橋梁刻印の比較。完全に一致することがわかる。これら「口+漢字」印と西尾市街で検出される「口+カナ」印のサイズはほぼ同じである。

旧敦賀港駅ランプ小屋”青”



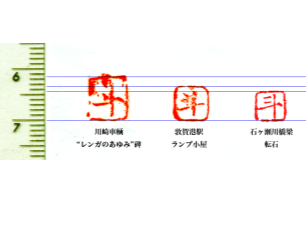
D:旧敦賀港駅ランプ小屋、初代揖斐川橋梁瓦礫、天竜川橋梁瓦礫
F:揖斐川橋梁～明治19年(1886)12月、天竜川橋梁～21年12月
H:揖斐川橋梁の「青」は一画目～四画目がやや欠けているが、重ねると骨格部分がよく一致していることがわかる。天竜川橋梁左岸の瓦礫から採取した「青」も揖斐川橋梁の欠けに似た傾向あり。なお「青」「平」はランプ小屋備え付けのパンフレットには掲載されていない。

旧敦賀港駅ランプ小屋”平”



D:旧敦賀港駅ランプ小屋、初代揖斐川橋梁瓦礫
F:揖斐川橋梁～明治19年(1886)12月
H:大きさ自体は一致するが、三画目に降に齧齧が見られる。全く同一ではないにしても同じ工場で使用された印と見てよいだろう。

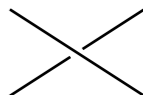
旧敦賀港駅ランプ小屋”斗”



D:旧敦賀港駅ランプ小屋、川崎車輛「レンガのあゆみ」碑、石ヶ瀬川橋梁瓦礫
F:石ヶ瀬川橋梁～明治24年(1891)6月
H:川崎車輛「レンガのあゆみ」碑(左)、ランプ小屋「斗」(中央)、石ヶ瀬川橋梁瓦礫「斗」(右)の比較。石ヶ瀬川橋梁のものは肉厚扇形異形煉瓦に打刻され、小口に「シー」の形状指示印がある。

不明

大台林業製材所転石



D:大台林業事業所跡転石
E:奈良県吉野郡下北山村(大台ヶ原)
F:大正6年(1917)～14年頃
G:分布状況
H:大正時代に大台ヶ原で伐採・製材を行なった大台林業の事業所跡で見られる煉瓦刻印。わずかに扁平な×印で、交差部に「重なり」が見られることから手書きと判断される。同事業所では中京耐火煉瓦、愛知煉石製の耐火煉瓦も見つかっており、中部方面から持ち込まれた煉瓦であることは確かである。

愛知県

【耐火】

東極産業(株)名古屋工場



A:名古屋市南区荒浜町2-12
B:昭和13年東極産業(株)名古屋工場→S23頃東海高熱工業(株)名古屋工場→?
G:社章(『耐火物年鑑』S16)
H:『大日本商工録』S16に社章掲載。シャモット煉瓦を製造。本社は東京市麹町区丸ノ内海上ビル6階、他に高松工場(高松市朝日町493)があった。第二工場は昭和55年以降まで存続。

愛知煉石(合名)?



A:名古屋市中区堀川町(M40)
B:明治26年(1893)6月(明治19年9月?)愛知煉石(合資)→明治40年12月合名→大正7年頃まで存続
C:大正期?
G:印影、分布状況
H:大台ヶ原山大台林業シオカラ谷事業所跡で見られる耐火煉瓦。事業所が大正年間に設けられたこと、印影より、同社のものと推定される。

三巴耐火煉瓦(株)



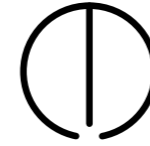
A:名古屋市東区矢田町10-51→矢田町17-19(S21)
B:昭和12年三巴耐火煉瓦(株)→昭和14年名古屋耐火工業(株)(名古屋耐火煉瓦第一工場)→昭和21年頃まで存続?
G:社章(『帝国商工信用録』S14)

名古屋耐火煉瓦(株)

N.G.R.

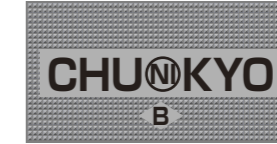
A:名古屋市東区矢田町10-51→矢田町17-19(S21)
B:昭和12年三巴耐火煉瓦(株)→昭和14年名古屋耐火工業(株)(名古屋耐火煉瓦第一工場)→昭和21年頃まで存続?
G:社章(『帝国商工信用録』S14)
H:矢田町10丁目は第一工場。東春日井郡水野村中水野に第二工場、岡崎市若松町字大廻りに第三工場。

東洋耐火煉瓦工場



A:愛知郡千種町
B:大正5年(1916)7月→大正14年頃まで?
G:社章(『耐火物年鑑』S16)
H:G-1印高礬土質高級耐火煉瓦、エス・エム高級耐火物を製造。

中京煉瓦(合資)



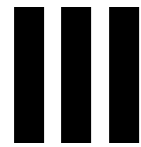
A:愛知郡千種町字豊前
B:明治40年(1907)10月中京煉瓦商会→大正3年(1914)7月中京煉瓦(合資)→昭和11年(1936)頃中京耐火煉瓦(株)
C:大正期
G:印影、分布状況
H:大台林業シオカラ谷事業所跡で「AICHI.F.R.」刻印の耐火煉瓦とともに見ついている耐火煉瓦。同時期に存在した中京煉瓦(合資)の製品か。

中京耐火煉瓦(株)

C.K.R

A:千種区都通1-1
B:明治40年(1907)10月中京煉瓦商会→大正3年(1914)7月中京煉瓦(合資)→昭和11年(1936)頃中京耐火煉瓦(株)
C:昭和期?
G:文献(『耐火物年鑑』S16)
H:S16『耐火物年鑑』には略号C.K.Rを掲げる。

中央耐火煉瓦製作所((株)加藤春吉商店)



A:東春日井郡高蔵寺村大字高蔵寺(T7)→高蔵寺町北5-1159(S34)
B:大正5年(1916)6月中央耐火煉瓦製作所((株)加藤春吉商店)→昭和24年中央窯業(株)→昭和45年頃セメント製造→昭和49年煉瓦製造
G:加藤春吉商店屋号(『帝国商工信用録』S14)
H:掲載マークは加藤春吉商店の屋号。耐火煉瓦への打刻は未確認。

難波耐火煉瓦製造所(難波耐火煉瓦(株))

N.T.R

A:名古屋市南区呼続町字一里28(S14)→名古屋市南区荒浜町1-28(S28)
B:昭和5年(1930)12月難波耐火煉瓦製造所→昭和34年頃難波耐火煉瓦(株)→昭和39年頃まで?
G:社章(『耐火物年鑑』S15)

尾張耐火煉瓦工場



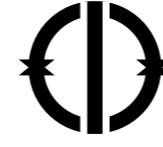
A:知多郡武豊町
B:明治29年(1896)11月創業(T8記載のみ)
G:文献(『商工興信録 本州中部地方』T8)

東芝炉材(株)



A:碧海郡知立町知立草刈10-1(知立工場)
B:昭和37年(1962)→昭和43年東芝セラミックス(株)
G:文献(『工業加熱』1967年10月号広告)
H:戦後雑誌の広告より。

愛知窯業(株)



A:碧海郡高浜町字穴戸50(S23)
B:昭和14年(1939)11月→昭和24年頃?
G:文献(『耐火物年鑑』S16)
D:岐阜県関ヶ原市関ヶ原酒造敷石
H:関ヶ原酒造の煙突付近の敷石に使用されているものは社章を挟む形で"AI" "YO"の文字あり。

山増耐火工業所(山増耐火工業(株))

YMT

A:恵那郡山岡町原258/従H(S32)→原山1532-1-1(S35)
B:昭和32年山増耐火工業所→昭和35年山増耐火工業(株)→現業
H:同社ホームページより。菱型で囲うのが正式か。

イソライト工業(株)

ISOLITE No4

A:豊川市市田町本野原1-100(豊川工場)
B:昭和34年→昭和47年頃まで
G:文献(『耐火物年鑑』S16)
H:『耐火物年鑑』広告より。イソライト断熱煉瓦を製造。No.は2、3、4、26が存在した。

四日市煉瓦(耐火)



D:中部電力パワーグリッド(株)四日市営業所構内
H:不齊なディンプル(布目?)のある表面に"YOKKAICHI BRICK CO. / JAPAN"と打刻。検出地は明治29年創業の四日市電燈(株)に起源するものと思われ、ディンプルを有する特徴からも比較的古い製品とみられる(四日市煉瓦は創業の頃から断続的に耐火煉瓦製造も行っていた。)。 (情報・写真提供:村上雅宣様)

岐阜県

【耐火】

美濃窯業(株)

MINO

A:土岐郡瑞浪町寺河戸719
B:大正7年(1918)→現業
H:岐阜県下最大の耐火煉瓦工場。各地に分工場を有した。現業。

昭和耐火工業(株)



A:土岐郡瑞浪町大字寺河戸1205(S14)
B:昭和13年(1938)11月～昭和23年頃?
G:社章(『耐火物年鑑』S16)
H:『耐火物年鑑』S16に社章記載。後に瑞浪支店となる。

三重県

【耐火】

中央硅石煉瓦(株)

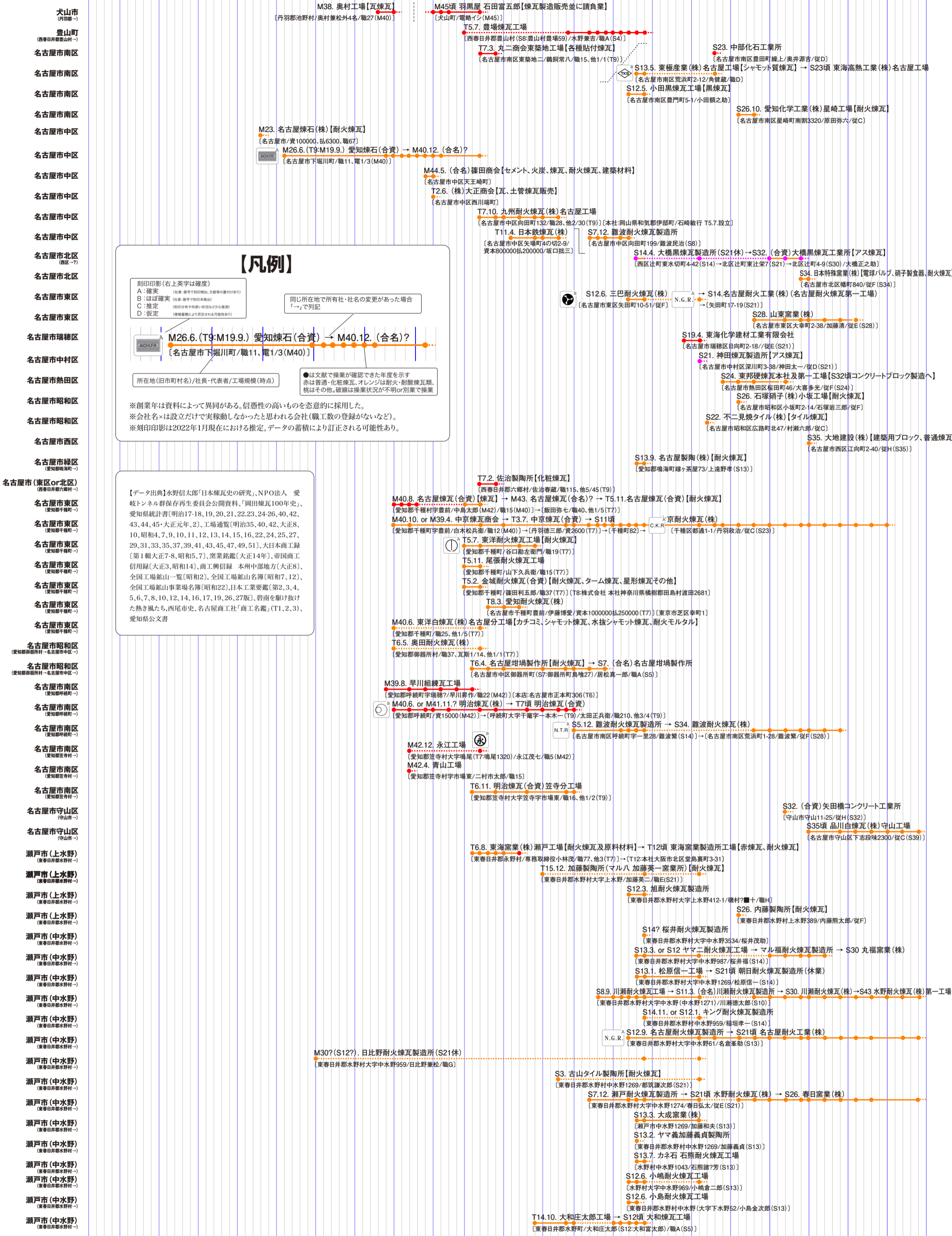


A:四日市市末広町34(S11)→四日市市末広町3(S28)
B:昭和9年(1934)6月～昭和21年頃美濃窯業(株)四日市硅石煉瓦工場→昭和49年以降操業
G:社章(『耐火物年鑑』S16)
H:『耐火物年鑑』S15に社章記載。当時珍しかった硅石質耐火煉瓦を専門に製造。徳島県瀬戸町にも分工場があったがほとんど操業せぬうちに戦後を迎え廃止された。

伊賀窯業(株)

I.G.K

A:阿山郡上野2522→上野市芳町2522
B:大正10年(1921)3月伊賀窯業(株)【テラコッタ製造】→昭和9年【耐火煉瓦製造】→昭和12年(合資)?→昭和14年(株)?→昭和49年以降操業
G:社章(『耐火物年鑑』S16)
H:『耐火物年鑑』に社章記載。I.G.K刻印の耐火煉瓦は県下や兵庫県など数カ所で見ついている。



【凡例】

刻印印影(右上英字は確定)
 A: 確定 (社名・番号で印刷確認、文庫等の裏付けあり)
 B: ほぼ確定 (社名・番号で印刷確認)
 C: 推定 (印刷番号や表裏の状況などから推定)
 D: 仮定 (情報量により否定される可能性あり)

同じ所在地で所有社・社名の変更があった場合
 「→」で列記

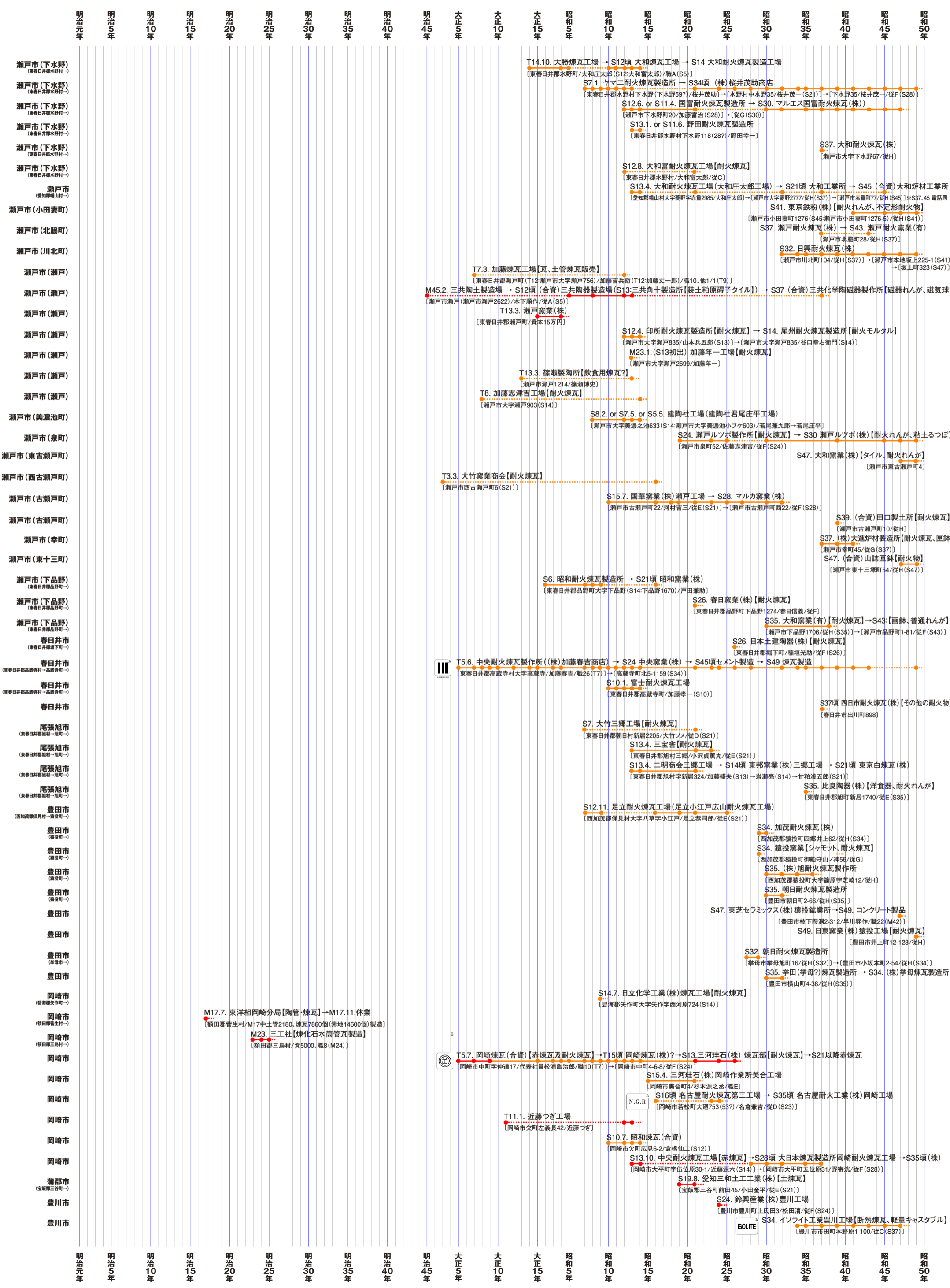
所在地(旧市町村名)/社長・代表者/工場規模(時点)

●は文献で操作が確認できた年度を示す
 赤は普通・化粧煉瓦、オレンジは耐火・耐熱煉瓦類、
 桃はその他。破線は操業状況が不明or別業で操業

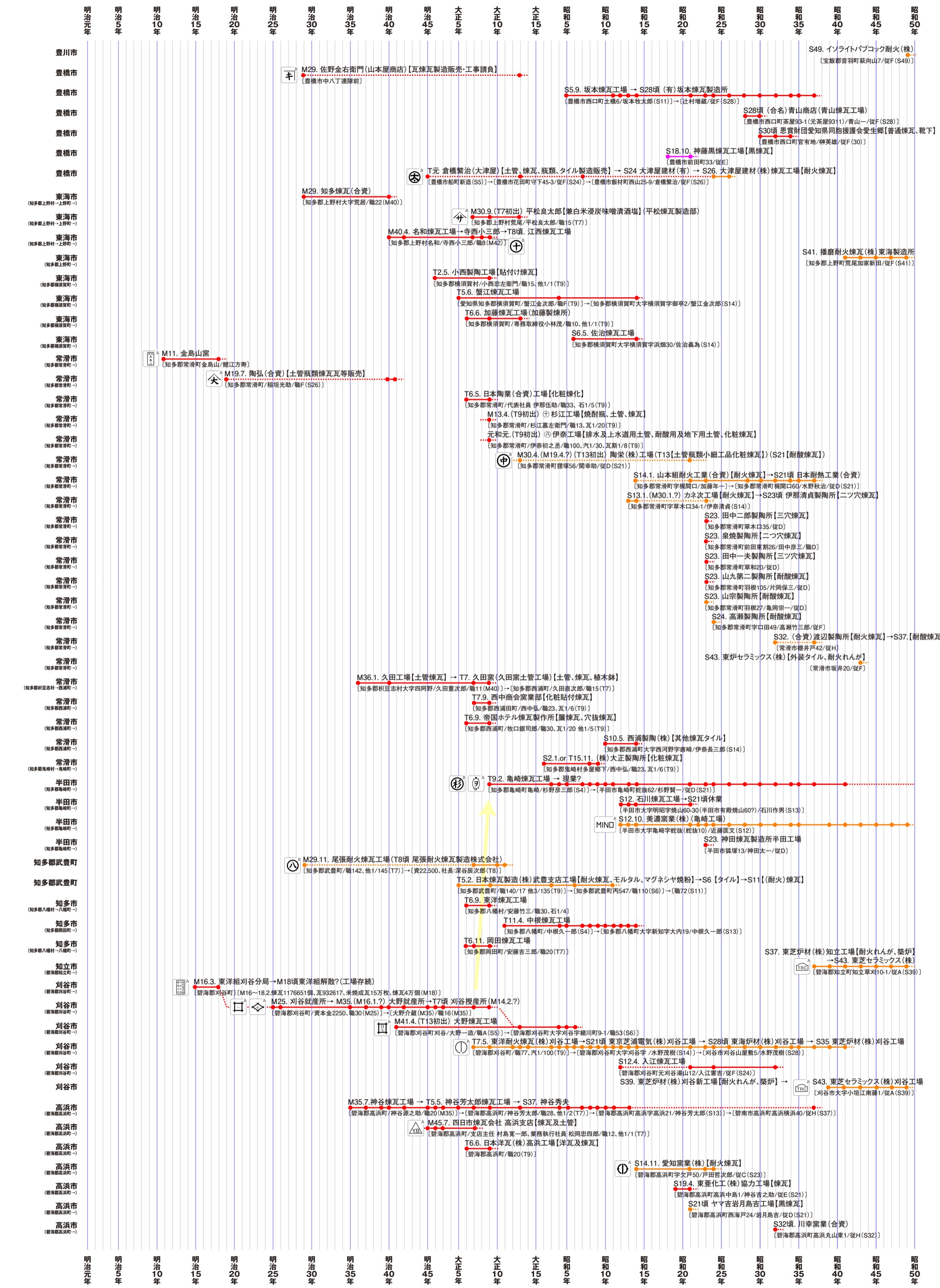
※創業年は資料によって異なる。信憑性の高いものを恣意的に採用した。
 ※会社名×は設立だけで実稼働しなかったと思われる会社(職工数の登録がないなど)。
 ※刻印印影は2022年1月現在における推定。データの蓄積により訂正される可能性あり。

【データ出典】水野信太郎「日本煉瓦史の研究」、NPO法人 愛岐トンネル群保存再生委員会公開資料、「岡田煉瓦100年史」、愛知県統計書(明治17-18、19、20、21、22、23、24、26、40、42、43、44、45・大正元年、2)、工場通覧(明治35、40、42、大正8、10、昭和4、7、9、10、11、12、13、14、15、16、22、24、25、27、29、31、33、35、37、39、41、43、45、47、49、51)、大日本商工録(第1輯大正7-8、昭和5、7)、窯業銘鑑(大正14年)、密商工信用録(大正3、昭和14)、商工興信録 本州中部地方(大正8)、全国工場鑑山一覽(昭和2)、全国工場鑑山名簿(昭和7、12)、全国工場鑑山事業場名簿(昭和22)、日本工業要鑑(第2、3、4、5、6、7、8、10、12、14、16、17、19、26、27版)、碧南を駆けつけた熱き風たち、西尾市史、名古屋商工社「商工名鑑」(T1、2、3)、愛知県公文書

愛知県下煉瓦工場の消長(1)

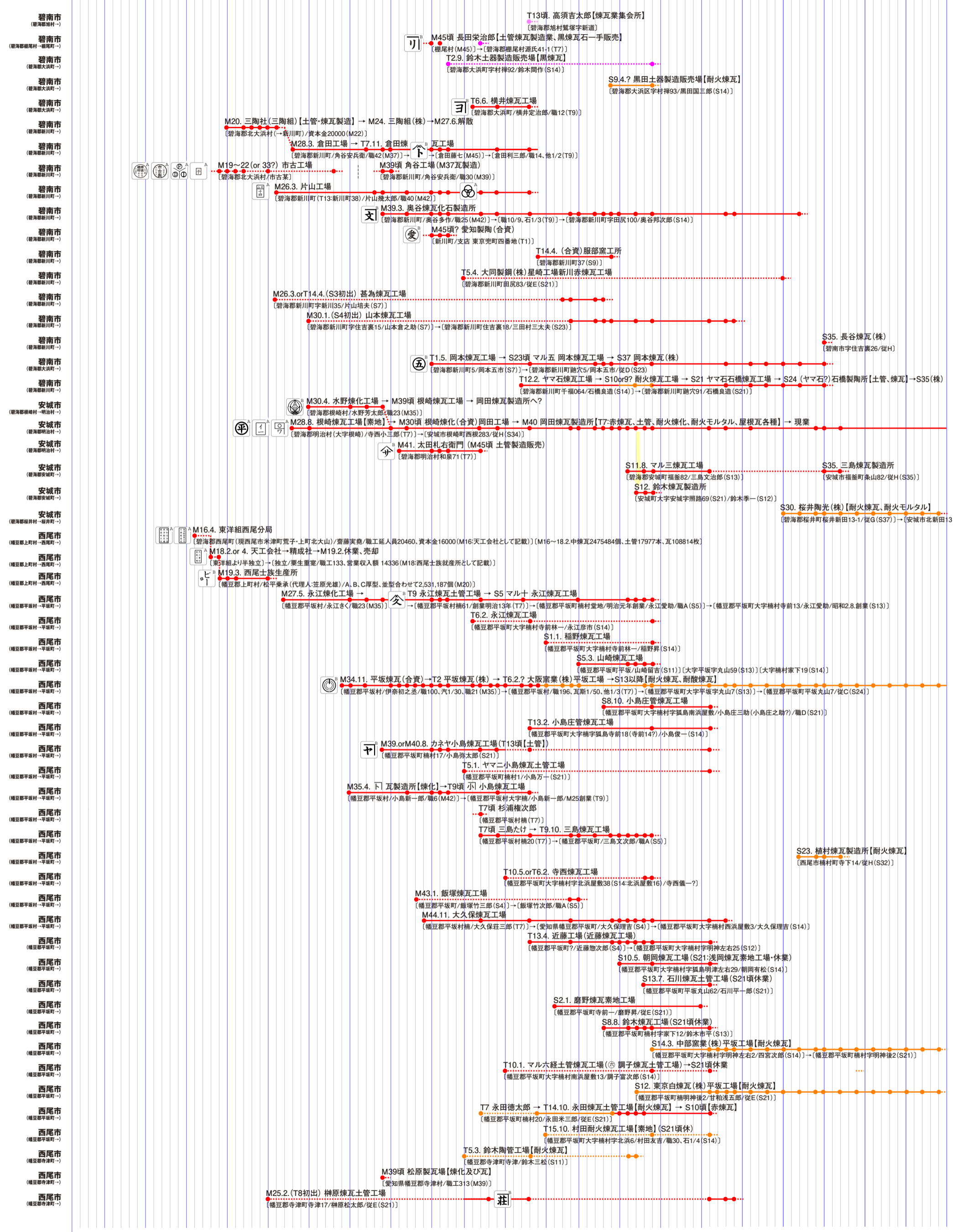


愛知県下煉瓦工場の消長(2)

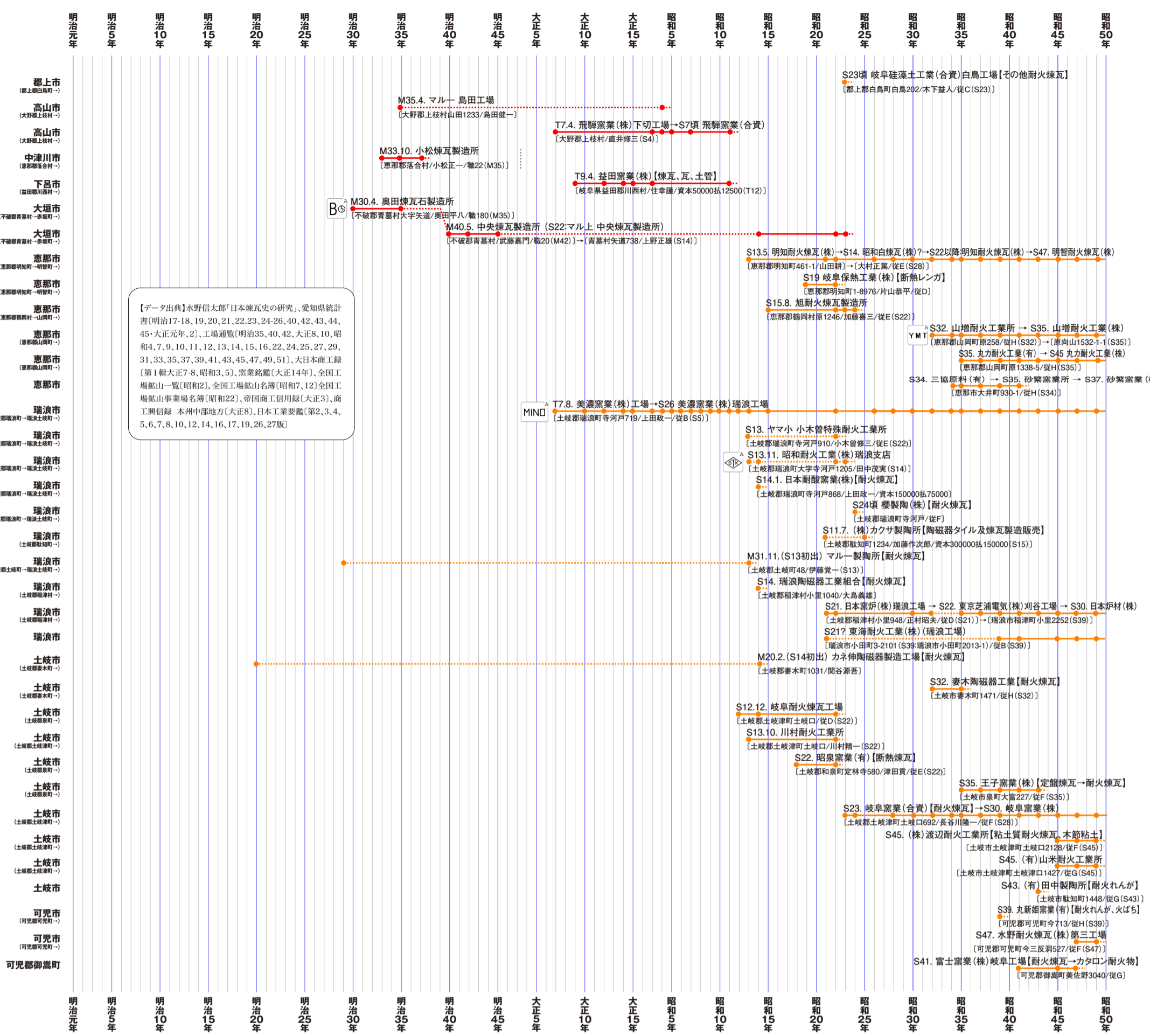


愛知県下煉瓦工場の消長 (3)

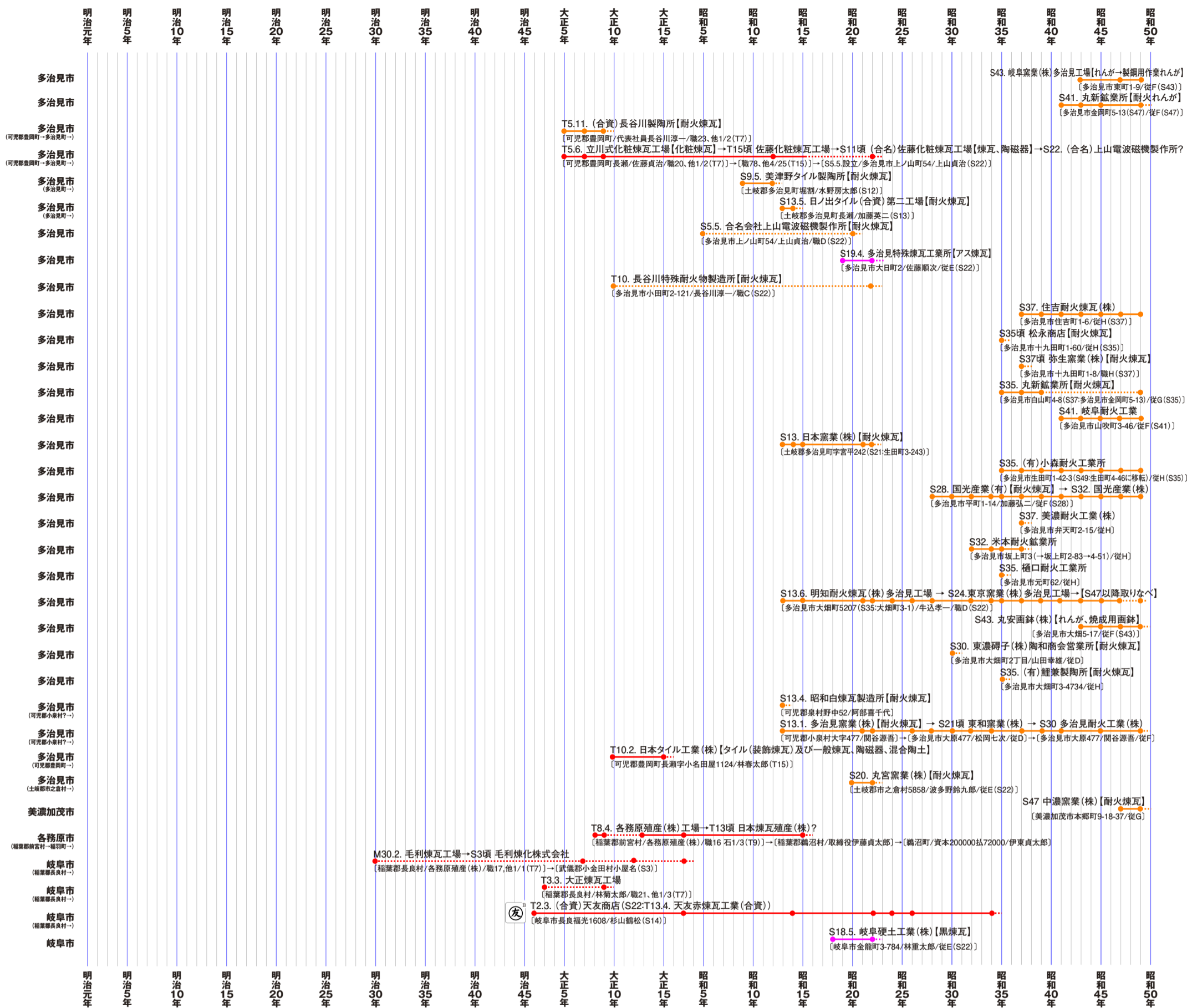
明治元年 明治5年 明治10年 明治15年 明治20年 明治25年 明治30年 明治35年 明治40年 明治45年 大正5年 大正10年 大正15年 昭和5年 昭和10年 昭和15年 昭和20年 昭和25年 昭和30年 昭和35年 昭和40年 昭和45年 昭和50年



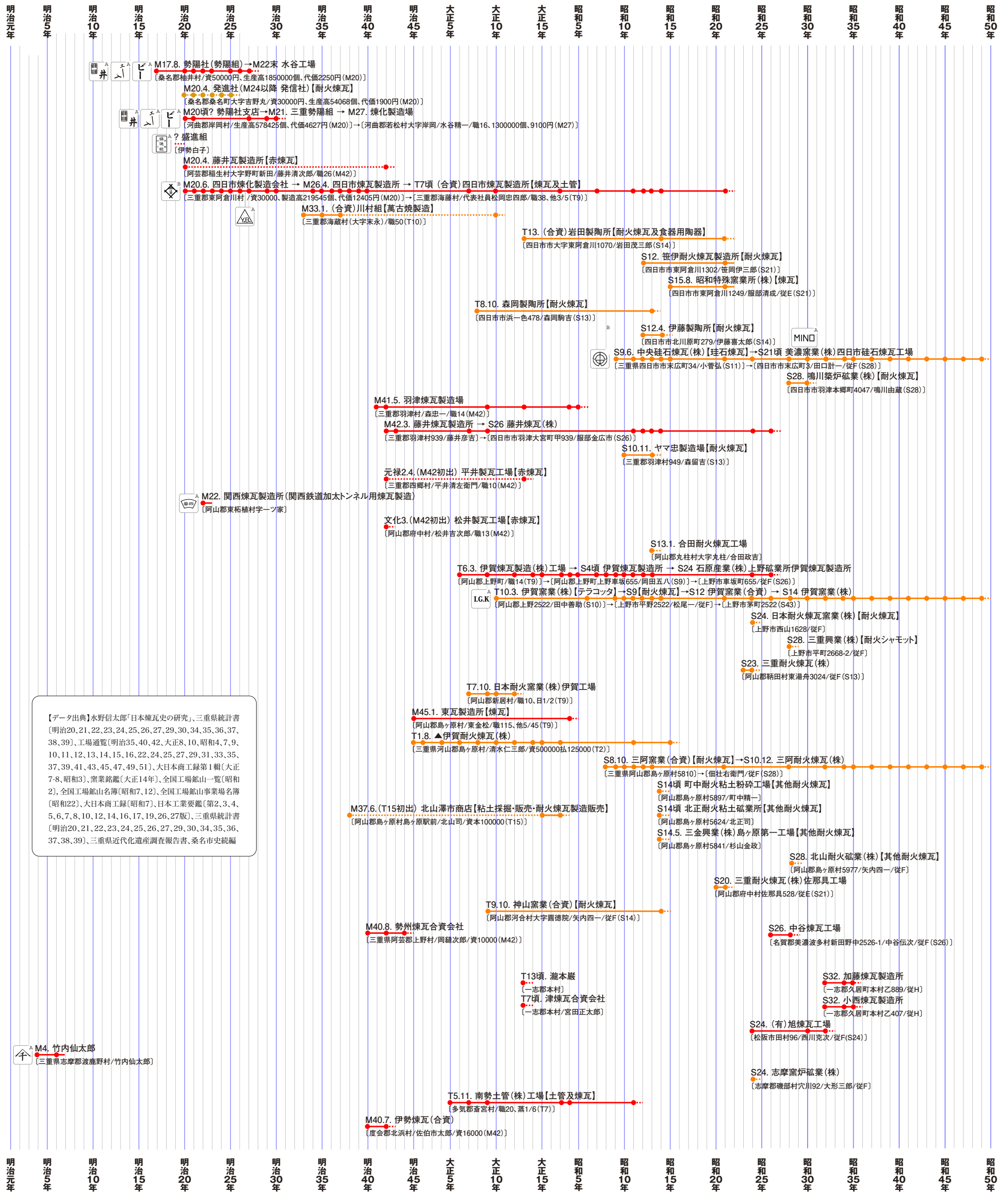
愛知県下煉瓦工場の消長(4)



岐阜県下煉瓦工場の消長(1)



岐阜県下煉瓦工場の消長(2)



【データ出典】水野信太郎「日本煉瓦史の研究」、三重県統計書(明治20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 29, 30, 34, 35, 36, 37, 38, 39)、工場通覧(明治35, 40, 42, 大正8, 10, 昭和4, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 22, 24, 25, 27, 29, 31, 33, 35, 37, 39, 41, 43, 45, 47, 49, 51)、大日本商工録第1輯(大正7-8, 昭和3)、窯業銘鑑(大正14年)、全国工場鑑山一覽(昭和2)、全国工場鑑山名簿(昭和7, 12)、全国工場鑑山事業場名簿(昭和22)、大日本商工録(昭和7)、日本工業要鑑(第2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 12, 14, 16, 17, 19, 26, 27版)、三重県統計書(明治20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 29, 30, 34, 35, 36, 37, 38, 39)、三重県近代化遺産調査報告書、桑名市史統編

三重県下煉瓦工場の消長